

光明第九号

光明を出す時がおくれました。さぞお待ち下さったことゝ存じます。おそくても十日頃までには皆様の御手につくようにしたかったです。十日の午後五時頃でした。「オジシスアス一〇ジシキ」という電報が来ました。日暮れる頃郷里に向かつて出発しました。夜十時すぎ帰りついて、この夢の様な、とてもあることとは思えない「叔父の死」を確かな事実として見る事が出来たのです。七日の日曜にかえらねばならぬことがあったので帰った時、「少し加減が悪い」と言って寝ていた叔父は、それからたつた二日の間に、急性脳膜炎のために、精神は狂乱し、七転八倒苦しんだまゝ、氷よりも冷たい屍となつてしまつたのです。

叔父の死が如何に悲惨な事実を生んだでしょう。叔母は本年生まれた正坊から、上五人の子供をつれて、祖母と共に後に残されたのです。眉毛をおとした青いあとのまだ新しい叔母は、姑と五人の子供をつれて、下男を相手に、可なり広い百姓をつゞけてゆかなければならないのです。叔父は近頃まで教育界にいました。そして、家に帰つてわずか三年の間、戸主をしたのみです。叔母も一緒にいましたから、農事には不熟であります、しかしこうした運命のもとに、苦しい奮闘をつゞけなければならぬ身となつたのです。

まだ尋常科を卒業したばかりの小さい男の子が上下姿で焼香に世継ぎとして、真つ先に出た時、多くの親類や会葬者の目の中には、「いぢらしい」「可愛想な」と思う熱い涙があふれました。死は人間としての終極であります。残つた多くの人々の口から幾度となく、死の不思議が歎かれてもそれほ唯何もない歎きです。(九月十五日)

巻頭の叫び！

一、幸薄き人達よ。

我々は幸薄きことを歎く前に、幸多き人を羨むより先に、目を太くし、耳をそばだてて、この大自然の形容と声とを聞け。

太陽は恵みと力を平等に一切万物に授けている。小さい一匹の虫も、天に聳ゆる大木も、そして我も、悉く太陽の公明正大な恩恵を浴びている。

青空を仰げ。清い空気は、一切生物を生かすがために、常に新に、常に清らかに、森羅万象を圍繞している。

土の香をかげ。全世界を包む豊穰な土は一切の生物を培い、育て、生かしている。

一羽の小さき鳥でさえ、この太陽と空気と土との恵みによって、健かな体を梢におどらして、身の幸を歌っている。

しかるに、我々は、体は五尺、その生命は全てに増して秀でたる「人」ではないか。

自然の恩恵を喜べ。  
大自然の一子平等の仁慈と救済との恩を思え。  
百花咲き満つ野に立てば、  
煌々とさえわたる月に向かえば、  
一望黄熟せる稲田を見れば、  
大波小波打ちかえす渚に立てば、  
ああ、それ大自然の恩恵。  
我を忘れて茫然無我、  
大自然に憧憬し、感謝し、歓喜する、讚嘆する、  
幸の涙に暮れざるを得ようか。

## 二、秋！

秋！  
七草咲きほこる秋。  
露結ぶ叢に長夜を鳴き明す虫の音、美しい秋。  
冴え渡る空に月の美しい秋。  
これらはすべて我々が生の讚美ではあるまいか。  
賤が伏屋にも月の光は入る。  
人里はなれた一軒家にも虫の鳴く音は無上の音楽である。  
孤燈の下に書物を播けば、  
あるいは思いを遠く故郷に馳せれば、  
あるいは悲しき友に思いを寄せれば、  
あるいは我が生霊の叫びを聞けば、  
秋は我らに覚醒を深刻に迫るの秋である。  
秋は収穫の秋である。  
書を読み、思いをこらせ。  
静かに我が神秘なる霊の叫びを聞け。

## 男一匹

「何、男一匹生きられる土地があるさ。」  
野良犬でも生きていくではないか。五尺の体を待った男一匹弱いことを言うまい。  
拳をかたくにぎって、二三度右手を振って見よ。人間の血が流れているだろう。その  
血だ。その血から出る汗だ。血と汗を惜しみさえしなければ、男一匹強く生きて行か  
れるさ。どうせ何かの使命をもって生れた自分なら、僕のこの血と汗がなくてはなら  
ぬところがあるにちがいない。その土地を見つけ出せ、いや、捜し出せ、いや、考え  
出せ。しかしながら、これもいかん、これも悪い。これもあわん。それも嫌だ、と上  
滑りしていたら、生涯見つからないぞ。立っていたら足がだるい。坐っていたら足が

痛い。腰をかけたら腎が痛い、寝ていたら退屈な世の中だ。血と汗を惜しまなんだら、**思案投首**見出そうと思わいでも、男一匹強く生き得る土地はどこにもある。

松は峯に、杉は谷に、田には稲、畑には大根と、全自我を活躍さすべき土地はどこにもある。間違つた政治をして人民を苦しめる大臣よりも、賄賂を取つて操を売る代議士よりも、金持ちの首を切つて、川にながす様な高等官よりも、大きな大根を作りあげたり、米を作る百姓や、十本の薪で他人のわかす風呂を八本でわかすことを考えている風呂屋の三助の方が増している。堅い腕節を二三度振つて、男らしい音がするか試して見よう。人生五十年、一度や二度は、汗を振つて、ニッコと笑える時もある。揮緊めて、そこらにぶらぶらしている男は今から社会という火の中に飛び出したらどうだ。

女子に問います。あなたはまさかという時には、一人で食つて行ける位の用意と勇気がありますか。夫が死んでも二人や三人の子供は人に笑われない様に育てる力がありますか。生馬の目を抜くはどのところは東京だけではありませんよ、一生涯日陰で白粉つけていられるかどうかわかりませんよ。マサカの時には襷一本キツとしてみても草鞋がけで出かけて行くか。お針一本すこいで通るか。ペンを取つて男の仲間入りするか、用意していらつしやいよ。なかつたら幸です。

諾と一つの返事が千金の重み

男一匹安く売るな。人に頼まれたら、オイソレと受け合うな。考えた後でなければ、完全出来ると思われないことを、オイソレと頼まれな。諾と一口受け合つたら、3必ず為さねばならぬ。生命は捨て、もせねばならぬ。それができなんだら男一匹廃つた時だ。男一匹価があるか。そこらにコロガル草履の破れた位な安い男か。他人は決めない、自然に自分で決めて行くのだ。自分が正しいと思つたら、争え。真理となら戦え。正々堂々の陣をはつて男らしく言い争え。唯しかし、自分が言っていることが正しくないことを知りつつ、或は人の言っていることが正しくて、自分の考えよりは優れていることを知りつつ、空虚な自分を飾らんがために、権力を無理にはらんだために、激烈な言葉と、強い腕力と財力とをたのんで、非理曲論をおし通したいほど、卑怯な男になつてはならぬ。

男一匹生命をかけて争えとは、真理と争えと争うのだ。他人が言いさえすれば、すぐ反対せよと言うことではない。たとえ平素は仇でも、それがもし、正義を口にするなら「諾」と腹を太く賛成せよ。義理に背き正義に反する時、「いけない」と一口頭を横にふる力と、如何なる場合にも真理の前には「よし」と一口頭を下げる雅量とは、これ男一匹の肝玉である。

女子の方よ、兄や夫や父など、男一匹完全に通らすためには、自分を捨てる位の力がありますか。妻にあまえつかれたために男一匹捨てた例は少くない。夫一人男らしく通らすためには、心では血の涙をのんでも、鬼になつて、盲目愛と戦われますか。

男一匹生きる時

チヨンマゲ結うて、お大名の前に土下坐していたのは百年昔である。今は、その職業は何であつても、人である以上、人として目醒めなければならぬ。肉体と精神即ち「我」の存在するからには、我は我として生き得る秋となつて来た。世界の大勢を見よ、全ての社会は真に目覚めたる男一匹女一人を要求してゐるではないか。華族貴からず、職工卑しからず、真に男一匹目覚めたる人の価値を認むる秋となつた。有難い！ 赤手空拳、裸一貫、財力もなければ学問もない我々でも「人」一人として目覚めた時、何物よりも強く生き得る秋となつた。男一匹自覚せよ。

## 我は如何なるものぞ (一)

『我』不可思議なる『我』

私たちは何も考えずにボンヤリしていますが一度自分という者について深く考えて見なくてはなりません。我は人である。我は身体と精神から出来た人である。人である。不思議はないといえればそれまでです。我々は、も一步踏み出して「我」を考えなくてはなりません。我々は親の体を借りて、この世界に生れて来ました。過去の自分は何であつたか。それも知らず、何の為に生れたかはおもひ知らず、ただ何もわからずに、この世に生れて来ていたのです。我々は一年とも知らず、五十年とも知らず、何時かわからないけれども、又再び露の如く、風の如く、死ななければならぬ。そしてその先は如何になり行くものか、わかりもしなければ、あてもない。

我は、ついに、目的も知らず、訳も解らずに生れて、死ななければならぬ。そもそ4も誰の意志によつて生き、何の目的のために死ぬるのだらう。

しかも一個の我は永遠の我である。田を耕す人、道を行く人、山の中にも町の中にも、人は数知れず存在しているけれども、顔も心も我と同じ者はない。世界何億人の中で、我以外に我はなく、我は宇宙の間に唯一個厳然として立っている。親は親である。兄弟は兄弟である。親も兄弟も我ではない。我はついに我である。ああ、この雑多複雑、宏大無辺の宇宙の中に、かくもはつきり、鮮かに「我」という者が一個の人としてあるということは何たる不可思議なことだらう。生命の神秘不思議を思わずにいられようか。

清い月が青白く世界を照らす時、世の中の全ての事象に遠ざかり、真面目に、静かに、自分一人「我」について考えて見ましよう。「自分は」、自分の生命は、と考えた時、世界にただ一つしかない自分が不可思議に思われぬ者がいまましようか。きつと、あなたは、「不思議なる自分よ！」と嘆声が出るでしょう。

空気は酸素と窒素などから出来ており、水は酸素と水素から出来ている。我々の体は、これを分解すれば炭素、水素、酸素、窒素その他すべてで十四ばかりの元素から出来ている。十四の元素は凝固して我が体を造っている。魂一度去つて五尺の体が氷の如く冷くなれば、バクテリアによつて十四の元素に分解してしまふ。火にたいしても熱によつて十四の元素にわかれてしまふ。分解した十四の元素は目には見えなくても、元素として、宇宙にかえり、髪一本も皮一切もなくなるのではありません。五

尺の体一個を元素に分解すれば、その容積は、一室や二室には入らない位大きなものになります。

宇宙より十四の元素をかりて、我が肉体をかたち造つて、それに我という生命を宿している。同じ十四の元素によりて出来ている体でありながら、我はついに我であつて、我と同じき人は一人もない。ああ不思議、何たる不可思議だろう。世界初より、人生れて死に、生れて死に、その数は何ほどだろう。生れては死に、生れては死に何ほどだろう。しかもその人達は全て異つた「人」として生れ、一個の我として生きていくことであろう。しかも我は今の世の我として、この世に、唯一個、我として生きていくことだろう。これより以後も何億年となく、人が我より違つた人として、数知れず生れ出ることだろう。前にもある後にもある数の知れないたくさんさんの生命の中に、やはり我は一個の生命として一人の我として生きている。ああ何たる我は不可思議の存在だろう。

お小さき我よ

自分たちは我が小さき眼をもつて、この大自然大宇宙を見なければなりません。宇宙と普通申しますが、「宇」とは時間のことであります。時間ということは果てしがありません。これより前にも時間の初はありません。五年前百年前、千年万年二億年前といくら遡つても今が初めという時はない、即ち無始・始めなしであります。そして又将来に於ても明日もあれば百年さきも万年さきも、やはり時間に終りはありません。始めもなければ終わりもないその時間を宇と言います。この初めと終わりのない永劫の間、我が生命は僅か五十年、何と短い間でしよう。宇宙の永劫に較べれば五十年は瞬き一つする間です。ああ、はかなき短き我が生命よ、と悲しくはありませんか。

「宙」というのは広さのことです。この世界には広さに果てがありません。我々の住んでいる地球は、その周りが一万里余、かなり大きい様ですが、この地球を去ること三千八百万里の遠きにある太陽は、その表面の広さが地球の一万二千倍あります。一秒間に七万六千里を馳る光すら、太陽より出でて地球に達するには八分十八秒かかります。これを、一時間十四里走る汽車に乗つて行くとすれば三百年かかります。太陽からかくも遠いものであります。

空の晴れた星の夜天を仰いで見渡せば、我々の目でさえ七千の星を見ることが出来ます。もし最もすぐれた望遠鏡によれば一億五千万の星を見ることが出来るそうです。しかも、あの多くの星の中には太陽どころか、大変大きなものがあるそうです。一秒間七万六千里走る光線すら、一万年を費して、我が地球に届くほど遠い星もあるのです。

大きいと見る地球も宇宙の大きさに比べては、粟粒一つにもあたりません。遠いと見た太陽すら宇宙の無限に較べては隣の人よりまだ近いのであります。東に向つて空を走つても、西に向つて走つても宇宙に果てはありません。ああ、この限りなき大宇宙の中、粟粒大の地球の上に住み、日夜営々として生きんがためにこれつとむる我

の小さきことよ、その身はわずか六尺に足らず、その目は一里の近きを見る能わず、ああそれ何ぞ我の小さなる。(つゞく)

### 光明が見えますか

(1) あなたの前途には光明が見えますか。今から先を思いわずらってはいませんか。あなたのでしている仕事を一生続けて行くだけの決心が出来ますか。これをやりたくない、どうかしなければならん、これをしていても駄目だと思いつながら、引きづられてはいませんか。「いやだ、駄目だ」と思いつてしている仕事には、快樂もなければ慰安もありません。したがって本気で努力も出来ません。光明のない生活です、そんな不愉快な無駄な生活を今日かぎりおやめなさい。これこそ自分の生涯の心血をそそぐべき仕事であるという、自覚のともなつた事業を見出しなさい。そして、それに精一ぱいの努力をするのです。

農業に従う人でも、何故もつと研究的な態度で、作物を作らないのでしよう。田を増やすことを考えないのだから。農業で立つならその地方の模範的、先覚的の百姓になつて農業の改良と、自分の経済の向上を計らなければなりません。五反百姓は一町百姓になることに、一町百姓は二町百姓になることが出来る様に努力して行きなさい。

正しい道に、自ら立てた目的に突進することが光明のある生活です。前途の光明を曇らすものは、とかく青年の陥りやすい安価な卑しい娯樂を知つて、その娯樂のために、自分がその虜となつてしまうことです。人は一度、安価な娯樂に心身を没入すれば本業には不忠実に、怠惰になつてしまいます。毎日毎日嫌々ながら仕事をすませて、その不平その苦惱をわずかに卑しい安価な娯樂によつて慰めるくらい無自覚な駄目な生活はない。為すべきことに自覚して、楽しんですれば、その為すこと自身が慰安である。

(2) 人生における全ての娯樂を否定するほど野暮な無趣味な人生観をもつとは言わないけれども、娯樂や趣味が人生ではない。やはり人生は奮闘でなければならぬ。努力の経緯でなければならぬ。趣味や娯樂はつやである、香である。人生そのものではない。つやや香がよくても、その物の本質が愚劣であつたら、その物の価値を認めることは出来ない。その物自身が高尚で、しかも、色とつやと香のある時、初めてそこに意義を見出すことが出来る。

貴重な秋の夜を、たくさん集つた青年らが、卑しい談話や、益にもならない世間の出来事を語りあつたりすることに興がつているなどに、何で人生、意義のある趣味などがわかう。無自覚と、下劣な趣味。これは人生における人間相の表と裏である。

(3) もう議論や理窟の時代は通り越しています。百の議論より、一つの実行が尊い。あなたの心は光明を放っていますか。あなたの生命は善い事をしたいと願ひ、あなた



の手は心の命令通り働きますか。なさい、なさい、よい事をなさい。黙ったままで実行の楽しい道に突入しましょう。

光明団に入っているあなたの行いがどれくらい他の人よりちがいますか。光明日誌はどのくらいあなたのしたよい事をもって飾られていますか。議論は実行のための議論です。我が言う人生観は、如何に我が行為の意義があるかのためであり、如何に千万言の激しい議論も、何も実行が伴わなければ何の価値もありません。実行なさい、日に一つでも、善い事のために働きなさい。

愛 理智なければ愛は盲目である。

徳川家康の大軍のために取り囲まれた大阪城はとても助かる見込みはなかった。真田幸村の様な軍略家がいっても、木村重成の様な武勇絶倫の勇士はいっても、淀君と大野の如きが計を用いなかつたために、もう明日は力一ぱい働いて死ぬるより外なかつた。

大阪城の中に、忠義の心飽くまでかたく、武勇力量ならぶものなく、しかも情にとんだ青年武士に、木村長門守重成という人があつた。重成の妻を白妙と言つた。白妙は真野豊後守頼包の女であつた。真野豊後守は重成が真の武士であることを知つて、白妙を重成の妻としたのである。白妙は又、大阪城内に於いて最も優れた烈女であつた。重成と白妙こそは、無双の勇士と絶世の勇婦の夫婦であつた。

大阪城の運命もこれまでだと思案に暮れた重成は、死を覚悟して家にかへつた。重成は白妙に言つた。「明日はいよいよ関東勢を追いまくるのだ。晴れの日だ。去年主君秀頼公より頂いた谷叢の鎧を着、兜には蘭香待の名香をたきこんで出たい、用意してくれ。」と言つた。重成の顔には少しの曇もないことを白妙はすぐ察した。昔から武士は討死せんと思ふ時は、兜に香をたきこむものである。しかし白妙も眉毛一本動さなかつた。夫の命令通り支度をした。

重成は、自分が討死するために、最愛の妻を殺すにしのびなかつたのだ。しかし、白妙にそれと知られたので、その夜二人はさゝやかな宴を開いてその志を語つた。しかし、二人の間には涙一滴見えなかつた。重成は白妙に後をたのんで寝につく、白妙は「どうか明日は、華々しくお働き遊ばして、美名を後の世にお残し遊せ、妾にも覚悟がございます。妾のために心残りのない様に……」と自分（以下原文不明）

その夜まだ明けないうちに、白妙は、装束をかえ遺書を認めて、短刀で美事自殺してしまつた。その遺書に曰く、

「一樹の蔭一河の流れ、他生の縁によるとこそ申し伝え参らせ候に、自ら君に思われまいらせ、去々年の頃より偕老の契りをこめ、ただ影に形のそすが如く思い思われ候えども、世の中の騒しさに、去年より、一日も安き心もなかりしに、今は世の中斯ふと見え、今日を限りの御催しとや、伝えきく唐土の項羽とやらんは、怖しき武将なれども虞氏のために名残を惜しみ、木曾義仲は猛将ときこえしが松殿の

美女になごり残せしとかや、さればとても浮世に望みつきたる妾が身なれば、君が御在世の中に先きだち参らせ候て、三途の巷にてこそ、必ず待ちおり参らせ候、くれぐれも右大臣様のご恩（以下原文欠）」  
白妙の夫に対する真の愛は、重成の美名と共に、永く後世の我々に何物かを教えている。

## 後記

□この夏総会を開く都合でしたが、妹が病気で一時危篤になったりしたので、つい時機を失ないました。お約束にそむいた点をおゆるし下さい。冬になったら来年早々かならず開きます。今から、お弁当の仕度してまっけて下さい。

□谷本先生の御病気もはかばかしくよくならないとのことです。お気毒にたへません。

□広島市内三篠町の吉村俊二君は父もなく兄弟もないお寂しいお身上ですのに、今又五日の朝たった一人のお母様がかえらぬ旅の客とおなりなさいました。何と気の毒なお身の上でしょう。深く哀悼の意を表します。

□長らく本校にいて下さった佐々木先生は今度おやめになって、呉工廠にお出でになることになりました。先生は、本団のために最もよく働いて下さったお方です。先生の去られるにあたって、先生の今までの御骨折を感謝せなければなりません。

□本団の板倉君が九月から鈴張校にお出でになることになりました。

□皆様の中で、もし、外所にお行きになるお方がございましたら、どうか、兄にだけはお知らせ下さい。女子のお方でお嫁などにお出でる時には、決して、口外は致しません故、かならずおきかせ下さい。そして、嫁入り先きまでも、もって行って下さい。光明の味がおわかりになるのは、実家を出てからです。

□今日は風邪をひいていましたが午後鉄筆をもって書いていたら、にげてしまいました。今日は休業日ですので、男子も女子もたくさんの方が来て、刷って下さい。夜も今、七人の人が、やはり、刷っていてくれます。休むべきを休みもしないで働いて下さる、真に嬉しうございます。かくしてこれが皆様の手に入るのです。本日もおくれすすみません。本気でお修養下さい。  
(九月九日夜 狂風)